

平成 24 年度海外研修（英語）報告 ——プログラム概要と初年度の成果——

高橋 史朗[†]・斎藤 明宏[‡]

FY2012 Study Abroad Program (English) Report

Fumiaki TAKAHASHI[†], Akihiro SAITO[‡]

ABSTRACT

This paper reports on the Study Abroad Program which was newly inaugurated at Hachinohe Institute of Technology in the fiscal year 2012. The program was planned and operated by the Institute's English Language Teaching Unit in conjunction with the Open Access College at the University of Southern Queensland, Australia. The paper provides the program's rationale, a brief overview of the program contents, and a small-scale thematic analysis. The analysis highlights the learning trajectories of the participants and their overall positive experiences of the program and outcomes.

Key Words: *study abroad, English language learning, cross-cultural awareness*

キーワード：海外研修，英語学習，文化認識

1. はじめに

大学あるいは大学生の国際化が求められるようになって久しい。例えば文部科学省は、文部科学白書（2008）において、「国際的なレベルの教育研究を行うことにより、大学の国際競争力を高めるとともに、国内外の社会に貢献することの重要性を謳い、「国際的に活躍できる能力を身につけた日本人」の育成を訴えている（p. 20）。語学はもちろん異文化理解を含む国際的素養を身につけた学生を育成することは、規模の大小や立地条件にかかわらず、あらゆる高等教

育機関が取り組むべき教育上の目標である。

その背景には、グローバル資本主義の急速な進展がある。農業や医療といった業界からの相当な反対圧力にも関わらず、民主党から自民党への政権交代があった後も PPT など種々の FTA 交渉が進展していることは、それを如実に示している。また、2010 年にファーストリテイリングや楽天といった企業が、英語を社内公用語化したことは記憶に新しいが、そこにもグローバル化に乗り遅れまいとする経営方針があることはいままでのままだ。例えば、楽天的三木谷浩史代表取締役会長兼社長は、2012 年 6 月に行われた日本外国特派員協会での記者会見において、新興国への進出といった事業のグローバル化とともに、外国人の優秀な人材の確保、外国人に受け入れられる商品の開発・販売を挙げている（増田、2012）。今や国際的素養を持つ

平成 26 年 1 月 8 日受付

[†] 感性デザイン学部感性デザイン学科・准教授

[‡] 基礎教育研究センター・助教

学生の育成は、広く企業に共有された大学に対する圧力となっている。

様々な教育機関で実施されている海外研修は、そのような社会的ニーズに沿った学生の育成に資する活動である¹。実際、文部科学白書（2008）も「グローバルな社会で活躍できる人材を育成する観点から、多くの日本人学生が留学を始めとして海外において学修する経験を得ること」を「非常に重要」と評価している（p. 23）。このような主張には、言語習得とそれ以外の一例例えば異文化理解のような国際的素養の獲得がひとくくりにされてしまっているが、そうであるからといって海外で学ぶという経験を軽んじることにはならないだろう。

海外研修の実施目的は、語学ばかりではなく、異文化体験と異文化理解の促進、現地での高度な専門的知識の獲得など多岐にわたる。しかし、一般に大学等で実施されている海外研修では、実践的な外国語の会話力の向上に力点が置かれる場合が多い。山田雄一郎（2005）は、日本を「圧倒的多数がモノリンガル」である社会とした上で、「環境的後押し」がない場合いつまでも外国語を話せるようにはならず、それを望むのであれば「『自然な』バイリンガル環境」を強固な意志と努力を持って生み出さなければならぬと述べている（pp. 78-9）。山田はそのような意志がなければ第二言語を獲得することは難しいという外国語習得の困難さを論じているのだが、別言すれば、バイリンガル環境に身を置くことは、いかに限定された期間であったとしても、外国語学習に一定の効果を発揮すると推測できるだろう。たとえ 1～2 週間の短期研修でも、ネイティブに理解され得る発音と理解され得ない発音の違いといった、異言語を集中的に使用することで体験的に得られる知識は少な

くない。

異文化体験が、とりわけ初めて海外に滞在する参加学生にとって、語学を学ぶ以上に大きな意味をもつ場合があることはいうまでもない。古藤友子（2001）は、「カルチュラル・アウェアネス」を異文化コミュニケーションの基盤として挙げている（pp. 104-7）。もちろん、彼女自身が指摘しているように、それは「異文化と十分につきあう」ことを目的とする場合には、最終的に「二重文化能力（biculturalism）、あるいは多重文化能力（multiculturalism）」が必要となるわけで（p. 107）、カルチュラル・アウェアネスをもって異文化を理解したことにはならない。しかし、カルチュラル・アウェアネスを得る機会として、海外研修には、確かに高い教育的価値がある。

一方、学生の海外留学等に関する意識の低下が、近年大きな問題となっている。経済協力開発機構（2013）は、「2011 年において、38,535 人の日本人学生が、海外の高等教育機関に外国人学生として在籍している。この数字は、2005 年に 62,853 人に達して以来低下し続けている…。日本の高等教育機関に在籍する学生のわずか 1.0%しか海外で学ぶことを選択していない—これは、オーストラリア、チリ、メキシコ、米国と並んで最も低いレベルである」と指摘している（p. 11）。このようないわゆる「内向き志向」をもつ学生の増加は、他のメディアによる調査からも浮き彫りとなっている。例えば、日本経済新聞が 2013 年 3 月～4 月に行ったによれば、「『留学したいと思わない』との回答が 25.6%、『あまり思わない』が 12.9%で、留学に後ろ向きの学生は計 38.6%」であったが、一方、「『留学したい』は 17.0%、『できればしたい』は 16.4%で、前向きの学生は 33.4%にとどまった」という（大学生、留学、2013）。「内向き傾向」は、「高度な知識、グローバル人材ネットワークへの接触、語学力、特に英語力の向上」といった「機会の放棄を示唆する」ものであって（経済協力開発機構、2013, p. 11）、社会的ニーズの拡大と完全に逆行している。

¹ここで海外研修とは、教育機関が主管し参加する学生を募って実施する比較的短期の海外での学習機会を指す。後述するようにその目的は主に語学の習熟であるが、他にも異文化体験や専門的な知識の習得などが含まれる場合もある。本稿では、これらをその目的によって細分化せず、海外の教育機関で学びながら、一定期間現地に滞在する活動を海外研修と呼ぶ。

この傾向は確かに一般的であるが、必ずしも「外国に出て行くというリスクに対する恐れ」（経済協力開発機構, 2013, p. 11）、その要因を集約することはできない。実際、日経の調査では、「留学に後ろ向きな理由（複数回答）」として 44.0%が「費用が高い」こと、ついで 43.8%が「外国語が苦手」であることを挙げているという（大学生、留学, 2013）。長期に渡る日本経済の低迷を脱しない限り、経済的な要因の劇的な改善は期待できない。また、馴染みのない外国に滞在することに対する不安は、いつの時代にも存在していたのであるから、欧米に対する憧憬の低下といった社会的な精神性の歴史的变化にも起因する。日本の学生が留学を望まない理由として、国外で学ぶことに対する恐れといった感情的な一すなわち教育指導によって短期的にとりさることが可能かもしれないような一要因があるかもしれないし、これら経済的困難や外国語に対する苦手意識がその一部を構成するかもしれないが、内向き志向の要因を「リスクに対する恐れ」といった一つの精神性に帰結することはできない。

短期の海外研修プログラムは、このような状況下において大学が学生に対して提示すべき有力な教育的選択肢の一つである。1～3週間程度の滞在であれば、長期留学と比較して経済的負担は相当に小さい。また、たとえ「外国語が苦手」と感じていても、それを克服したいと希望している学生は少なからず存在するし、社会的ニーズを考慮すれば、そのような学生数は今後増加するものと見込まれる。外国に対する漠然とした不安も、期間が短いことや同じ大学の友人と研修プログラムを共有しているという感覚によって、和らげられるかもしれない。とりわけキャンパス内で外国語を耳にする機会が少ない地方の大学で学ぶ学生にとって、長期休業期間中に参加できる短期プログラムの意義は大きい。

八戸工業大学では、全学科に海外研修を正課として導入し、国際性を有する学生の育成を目的に、全学教育プログラムの一つとして語学を

中心とする海外の大学での研修を位置づけている。すでに多くの学生が中国あるいはアメリカ合衆国での海外研修に参加し、他の科目では提供され難い体験をもって帰国したが、社会的背景及び教育的な観点から、短期の海外研修の重要性は、今後これまで以上に高まることが予想される。また、八戸工業大学は地域の小規模大学であり、在籍する学生にとって、海外研修は直接的に外国語や異文化に触れる極めて貴重な機会となっている。そこで本小論では、2012年度に初めてオーストラリアの南クイーンズランド大学（University of Southern Queensland: 以下USQ）で実施された海外研修とその成果について、参加学生の経験と学習成果分析を含めた詳細を報告する。

2. 研修先大学

平成 24 年度海外研修（英語）が、基礎教育研究センター英語教室によって企画・運営された。主要研修地は、オーストラリア・クイーンズランド州トゥーンバ市にある USQ トゥーンバ・キャンパスであった。トゥーンバ市の人口は 13 万人余りである²。ほとんどの主要都市が沿岸部に点在するオーストラリアにおいて、同市は首都特別地域であるキャンベラに次いでオーストラリア最大の内陸都市圏を形成する。研修先である USQ は 1967 年に Queensland Institute of Technology (Darling Downs)として創設され、2013 年現在、工学・測量学部、理学部、経営・法学部、教育学部、人文学部を擁する公営の地方総合大学として運営されている。工学部は最も歴史のある看板学部であり、特に農業工学 (agricultural engineering) と環境工学 (environmental engineering)は競争力を持つ分野である。3 つのキャンパスはすべてクイーンズランド州内の南東部に存在する。本部のある最大

²参考として主要都市の人口を挙げると、シドニー 467 万人、ブリスベン 219 万人 (Australian Bureau of Statistics, 2013a)、ケアンズ 16 万人 (Australian Bureau of Statistics, 2013b) である。

規模のトゥーンバ・キャンパスに始まり、ブリスベン近郊の新興開発住宅地区の名を冠したスプリング・フィールド・キャンパス、また世界遺産として登録されている世界最大の砂の島フレザー島の玄関口、ハービー・ベイ地域にフレザー・コースト・キャンパスを構える。

オーストラリアは広大な土地に人間の生活基盤が点在するという特徴がある。そのため、世界でも遠隔教育がいち早く発達した。USQ は 1978 年に通信教育を開始した。1999 年には USQOnline を開設し情報通信技術(ICT)による遠隔教育に着手した。以来、ICT を駆使した遠隔教育で培った実績が評価され、2000-2001 年の Australian University of the Year に選出された。2004 年には遠隔教育の推進とそれに支えられた開かれた学び (open learning) の実践が評価され、英連邦各国元首を構成員とする The Commonwealth of Learning より The Commonwealth of Learning Award of Excellence for Institutional Achievement を受賞している。さらに同年、アメリカ合衆国の The Distance Education Training Council より質の高い遠隔教育としての認証を受けるなど、e-University としての地位を確立している。現在は世界 133 か国から計 25,000 名あまりが履修しており、その内遠隔教育履修者が 6,000 名以上を占めている。

USQ の英語文化プログラム (English Language and Culture Program: 以下 ELCP) はオープン・アクセス・カレッジ (Open Access College) によって運営され、英語や社会文化を学ぶための短期研修プログラムを提供している。インド、中国、韓国などのアジア地域を筆頭に、日本からは中京大学、立命館大学、安田女子大学、同短期大学などから大学生を受け入れてきた実績がある。平成 24 年度、八戸工業大学からは学生 5 名が参加し、教員 1 名が引率した。

3. 行程とスケジュール

本学一行は 2013 年 2 月 16 日 (土) 10:06 に JR

八戸駅を出発し、翌 17 日 (日) の 14:25 に USQ に到着した。大学への通学は、ホストファミリー宅に近いものは徒歩で通学し、遠方の場合にはファミリーが送迎をした。授業は 1 コマ 90 分で、午前中に 2 コマ、午後に 1 コマが行われた。午前中の 1 コマのあとには、オーストラリア特有の習慣であるモーニング・ティーの時間が設けられた。最終日にはファミリーを紹介するというプレゼンテーションが行われ、学生は積極的に課題や授業準備等いそしんだ様子であった。同時期に立命館大学と広島県の安田女子大学、同短期大学の学生も滞在しており、一部の学生との交流も見られた。お互いに同じ大学生として、交流をしたことは良い刺激になったようである。授業以外にも課外活動が設けられた。オーギー・スタイルのバーベキュー、フォーク・ミュージックにあわせて広場で円を作って踊るブッシュ・ダンス、上記他大学学生とのヨガの合同授業、週末のブリスベンへの日帰り旅行など、息をつく間もないほどの充実した滞在であった。

行程最終2泊はゴールドコーストでの語学実践で、大規模ショッピングモールであるパシフィックフェア (Pacific Fair) への訪問を予定していたが、低気圧の接近によるあいにくの天候のため若干予定を変更した。ゴールドコーストいちばんの繁華街であるサーファーズ・パラダイス周辺で土産を購入し、オーギービーフのステーキや日本食を楽しみながら、ゆったりと過ごし帰国の長旅に備えた。2月27日 (水) 午前、滞在先ホテルからブリスベン空港へ向かい、14:20 ブリスベンを発ち、翌日 13:06 に JR 八戸駅に到着・解散となった。

4. ホームステイ・ファミリー

滞在中、参加学生たちは現地のホストファミリー宅で家族の一員として過ごした。参加した M さんのホストマザーは、インドからの移民 2 世で、娘さんと二人のファミリーであった。出自をたどればインドだが、話す言葉は生粋のオ

ージーイングリッシュである。S 君は、ホストファーザーとホストマザーが、オーストラリア固有生物の保護に携わるワイルドライフ・ケアラー（wildlife carer）の方であった。彼のホストマザーは、ボッサムと呼ばれる小さなフクロギツネを、ホストマザーが出かける先にその大きな体のどこかに忍ばせていた。リビングには怪我を負い保護されていたワラビーの子どもがおり、S 君は毎朝ワラビーに見送られながら通学した。W 君はファミリーと、トゥーンバにあるテーブルトップ・マウンテンと呼ばれる文字通りテーブル上の巨大な台形をした山を訪れ、果敢にもサンダルひとつでトレッキングをやり遂げた。W 君のホストファーザーはイングランド、ホストマザーは中米からやってきた移民 1 世の家庭で、高校生のご子息は日本のゲームを好む高校生の息子さんと歳が近くよく打ち解けたようである。移民国家オーストラリアならではの多様な背景を持った家族と共に、オーストラリアにしかない自然環境を体験し、世界の広さと多様性を目の当たりにした。

5. プログラム・コンテンツ（学習内容）

この研修は上述のように、国際性の涵養と語学力の向上を目標とする。オーストラリアという多文化社会やそこで行われるライフスタイルを現地で暮らす人たちと同じ視点で直接体験しながら、同時にそれを体験できるようになること自体を動機づけとして、自然に語学力を習得できる点に特徴がある。USQ オープン・アクセス・カレッジの運営による研修プログラムは、各大学の学生のニーズにあわせた柔軟なカリキュラム設計を可能としている。本学学生の参加するプログラム内容も、英語教室と USQ オープン・アクセス・カレッジが共同で立案し、計画されたシラバス・コンテンツによる学習が行われるようになっている。計画立案にあたって重視されるのは、学生が現地で直面するコミュニケーション場面を想定した、そこで必要な言語

形式の知識や、文化的に適切な表現方法の自然な習得である。したがって、あらかじめ指定された教科書や目標とする文法項目、また特別に重視される技能（リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング）などは設定されていない。あくまで現地での生活適応を主眼とし、その目標を動機づけとした知識と技能の習得を志向している。そのため自然に動機づけが行われ、英語が学習の対象として意識されない活動を多数行うことができる。就職のための検定試験のスコアアップや単位取得を目的とした、英語を対象化した学習とは決定的に異なる利点である。

学習を助け促すための言語素材は、ハンドアウトなどの形で提供されるものもあれば、形としては残らない言語活動も含まれる。英語力は種々の言語活動を通して言語素材に触れ、実際に使用した結果として残るものとしてとらえられる。この方針は USQ 到着翌日に行われるオリエンテーションから徹底されている。オリエンテーション第一時間目の授業活動では、学生たちにストリート名まで表示されたトゥーンバ市内の地図が与えられ、市内全域の中から自分のホームステイ先の位置を探し、自分がどのストリートに滞在しているかをクラスに発表することを一人一人求められる。これを母語環境で行うのであれば、いともたやすい作業である。しかし英語環境の中でこのような活動を多数行うこと、またここで必要とされる技能を項目別に分けて考えると、初日のオリエンテーションといえども内容の希薄化された活動が行われるわけではない。むしろ非常に意味のある学習活動が行われている。

地図を用いた作業では、（1）日本語環境で既に習得した地図の読み方の知識を転移させながら、（2）地図上の文字を音声知識と一致させ、（3）その作業で得られた情報に基づいて自分の滞在位置を特定し、（4）それを他人に伝えるという学習が生じる。当然、情報を伝える相手はクラスの学生だけではない。クラス外で初めて

出会う現地の人にも、自分がいまどこに滞在しているのかを話す場面が想定されている。そのようなクラス外の経験を通じ、知識と技能が強化されることが期待される。また、地図を読むという作業に必要な既習の知識が、別な言語で作成された地図においても同様に転移できるといふ暗黙知が強化される。表現に必要な言語形式や語彙はインストラクターによってあらかじめ提示される。地図で得られた情報を英語で表現するという自然な動機づけによって、そのために必要な語彙や言語形式が、水が低いところへと流れるように無理なく転写され習得が開始されるのである。オリエンテーション当日には与えられた英文の指示書をもとに、学生同士ペアになってキャンパス内を探索する活動も行われる。図書館に通じる階段の段数を数え、指示された受付係員を探し図書館に関する情報を聞き出す。このような一連の活動を通じて得た情報を記録してクラスに持ち帰り発表する。ペアごとに異なる情報を発表しあうことで、クラスがキャンパスについての全体知識を相補的に構築していく (Palincsar, 1998)。これ以降内容も複雑化する。英語圏で伝わる神話を読んだうえで、イラストを用いながらそのストーリーを再構成しクラスに発表するといった活動や、最終日にはホストファミリーの住まいやメンバーについてプレゼンテーションを行うといったチャレンジな活動も行われる。最新の教育理論に裏打ちされた一連の学習活動を、母語ではない英語を用いて行うものの、数々のスモール・ステップ (Krueger & Dayan, 2009) が設けられるため、最終日のプレゼンテーション発表まで無理なく学習を進めることができる。

6. 研修成果

学生の帰国後レポートを分析対象として、簡易な分析を行った。データは学生が帰国後に研修を振り返って各自が自分にとって重要と考えた経験について記述したレポートである。分析手

法は主題分析を採用した。主題分析とは、話し言葉や書かれた文章などの定性データ (テキストなど) を探索し、話者や筆者の産出したテキスト内において焦点化されるテーマ (主題) や下位テーマが、相互にどのような関係性を生み出し全体を構築するのかを探ることによって、データ全体を俯瞰しテキスト産出者の経験を整理・理解するための分析手法の一つである (Boyatzis, 1998)。

本小論で提示する分析には次のような制約が存在する。レポートは成績評価の対象ではなかったものの、高等教育の文脈においてレポートというテキスト・ジャンルが作成者である学生に肯定的な内容を記述することを暗黙に促す側面もある。したがってレポートから得られたデータのみをもって、研修全体を通じての学生の全経験を網羅することは困難である。また、帰国後に作成されたことに由来する記憶の不完全性も生じる。これらは解釈の際に注意すべき事項である。

分析の手順は次の (1) ～ (5) のように行った。まず、(1) 参加学生 5 名が電子ファイルで作成したレポートのテキストデータをすべて一つのファイルに統合した。(2) テキストを幾度も読み込み、全体の理解を深める作業を行った。次に、(3) 重要なテーマを論じるために鍵となると推察される、繰り返し立ち現れる語彙と語句を特定した。さらに、(4) これらの語彙と語句を内容の類似性を基準としてカテゴリー化した。その後、個々の学生のレポートを参照しながら、これらの (5) 語彙と語句を研修前、研修中、研修後の時系列に振り分けた (表 1)。

ここで見てきたデータすべてに関わる一つの大きなテーマは、学生の英語を使用することについての前向きな意識や、未知のものに対する知識欲を含めた意識の変化であった。出発前においては、期待と不安が交錯する意識が読みとれる。海外文化に対する関心やそれに初めて触れることへの期待と同時に、すべてが英語で行われる生活を直に体験することや文化的習慣の違いに対する不安が混在していることがわか

る。しかし実際に現地での生活が始まると、初期には初めて生活を共にする英語圏のファミリーとの言葉の違いに由来する緊張感、英語で行われる授業活動の困難さ、生活習慣の違いに起因する戸惑いがみられる。そうした中でも、初めての経験に新鮮味を感じているようすも認められる。しかしこれらの困難さをジェスチャーを用いたり絵を描くなど、初学者にとって意思疎通を図るために重要なコミュニケーション・ストラテジー（Kasper & Kellerman, 1997）を創造的に考案しつつ乗り越えていく過程も認められる。また、この過程においてホストファミリーやインストラクターが果たす役割が大きいことが推察される。

表 1 時系列分類テキストデータ抜粋

出発前	初めて 日本文化 海外文化 興味 期待と不安 不安 行ってみよう 生の英語 文化・生活の違い 心配 触れてみたい 不安
滞在中	（初期）触れる 実際に 経験 わからず 戸惑う 聞きとる 難しかった 新鮮 ホームステイ 実生活で 機会 文化 歴史 直接 経験 緊張 伝わらない あきらめて
	（中期）次第に 理解できるように 少しずつ 現地で 楽しく 積極的に 講義 わかりやすく できるように ジェスチャー ノートに単語 絵を描いて 簡単な英会話 先生 ホストファミリー サポート ホストマザー 理解できる うれしく 積極的に行動 違う 水事情 楽しい 文法 少しずつ 聞き取れるように 悔しい だんだんと 粘り強く
	（終期）世界共通で話されている言語 文化と歴史 アボリジニー 先住民 帰りたくない また行きたい
帰国後	経験 活かしたい 英語 向上させたい 価値観 変わり 広い視野で 広い世界について 知っていきたい もっと知りたい 話せるようになりたい 大変良かった すばらしい経験

滞在終期にかけては困難な時期を経ながらも次第に聞き取りの能力が向上し、コミュニケーションにも余裕も生まれてくるためか、水事情などに由来する生活習慣の違いやオーストラリア社会の文化・歴史にも意識を向け始める。そして研修全体を通じて得た経験が得難いものであり、広い世界の一員としての自分の価値観を

相対化しながら、英語力の伸長に限らず今後の学生生活について向学心を育んだ様子が認められた。

7. おわりに

以上のように、全体としては冒頭に述べたような研修の目的を概ね達成することができたと評価できよう。参加学生たちは、大学での学びやホストファミリーとの英語漬けの生活という自然なバイリンガル環境に身を置きながら、英語を浴びるように聞き、リスニング能力やわからなくとも話してみるという態度を養うことができた。また、慣れない英語を使用しての困難な状況にあっても、地理、環境、文化の違いに由来する諸習慣の差異との出会いを契機としてカルチュラル・アウェアネスの芽生えを体験した。たとえ英語力には制約があろうともバイリンガル環境の中で、自らがコミュニケーションの主体として機能することができたという成功体験は、今後さまざまな場面で—それと気づかない形ではあるかもしれないが—彼らの人生を豊かなものにしてくれる力となると確信する。

謝 辞

研修実施に際しまして、本学各部署の皆様から物心両面で多大なご協力をいただきました。また、研修先大学教職員にも多岐にわたり細やかなご支援をいただきました。厚く御礼申し上げます。

参考文献

- Australian Bureau of Statistics. (2013a). *Regional Population Growth, Australia, 2012: Cat. No. 3218.0—2012 Estimated Resident Population Table*. Canberra: Australian Bureau of Statistics.
- Australian Bureau of Statistics. (2013b). *National Regional Profile: Cairns (R): Population/People Table*. Canberra: Australian Bureau of Statistics. Retrieved from <http://www.abs.gov.au/AUSSTATS/abs@npp.nsf/Latestproducts/LGA32070Population/People12007-2011?opendocument&tabname=Summary&prodnno=LGA32070&iss>

- ue=2007-2011
- Boyatzis, R. E. (1998). *Transforming qualitative information: Thematic analysis and code development*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- 大学生、留学「意向なし」4割強い内向き志向.(2013). *日経新聞 Web 刊*. Retrieved from http://www.nikkei.com/article/DGXNASDG18014_Y3A810C1CR8000/
- Kasper, G., & Kellerman, E. (Eds). (1997). *Communication strategies: Psycholinguistic and sociolinguistic perspectives*. London, UK: Longman.
- 経済協力開発機構. (2013). 図表でみる教育 2013 年版 : OECD インディケーター. Retrieved from http://www.oecdtkyo2.org/pdf/theme_pdf/education/20130625eag2013_cntntjpn_j.pdf
- 古藤 友子. (2001). 異文化を考える. 飛田良文(編), *異文化接触論* (pp. 73-116). 東京, おうふう.
- Krueger, K. A., & Dayan, P. (2009). Flexible shaping: How learning in small steps helps. *Cognition*, 110(3), 380-394. doi: <http://dx.doi.org/10.1016/j.cognition.2008.11.014>
- 増田 覚. (2012). 楽天が 7 月から社内公用語を英語に、三木谷社長『日本企業は目を覚まして』, *Internet Watch*. Retrieved from http://internet.watch.impress.co.jp/docs/news/20120629_543732.html
- 文部科学省. (2008). *文部科学白書 2008*. Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpaa200901/1283098_004_01.pdf
- Palincsar, A. S. (1998). Social constructivist perspectives on teaching and learning. *Annual Review of Psychology*, 49(1), 345-375. doi: 10.1146/annurev.psych.49.1.345
- 山田 雄一郎. (2005). *英語教育はなぜ間違っているのか*. 東京, 筑摩書房.

要 旨

本小論は、初めてオーストラリアの南クイーンズランド大学（University of Southern Queensland）で実施された 2012 年度海外研修（英語）について報告する。研修プログラムは本学基礎教育研究センター英語教室と、研修先大学である南クイーンズランド大学のオープン・アクセス・カレッジが共同で立案・企画したものである。本論は研修プログラムのねらい、プログラム概要、および参加学生の経験と学習成果分析を含めた詳細を報告する。

キーワード : 海外研修, 英語学習, 文化認識